氏　　名	納谷　亮平
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　８４３３　号
学位授与年月日	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	A Study on Semi-lexical Categories in Word-Formation in English and Japanese （日英語の語形成にみられる半語彙範疇に関する研究）

主　　査	筑波大学　教　授	文学博士	廣　瀬　幸　生
副　　査	筑波大学　教　授	博士（言語学）	加　賀　信　広
副　　査	筑波大学　准教授	博士（言語学）	島　田　雅　晴
副　　査	筑波大学　准教授	博士（言語学）	和　田　尚　明
副　　査	東北大学　准教授	博士（文学）	長　野　明　子

論　文　の　要　旨

本論文は、Emonds (2000)で提案されている「二分化語彙モデル」（Bifurcated Lexical Model、以下 BLM）を応用して英語および日本語の語形成に関わる現象を分析し、それにより形態理論研究の進展に寄与することを目的としている。特に、従来、統語論において断片的に取り上げられることが多かった半語彙範疇（semi-lexical category）に焦点をあて、屈折、派生、複合といった形態論、語形成の観点から理論的に特徴づけを行い、その構造と機能を体系的に記述・説明するものである。

語は通常、語彙範疇（あるいは内容語）と機能範疇（あるいは機能語）に大別される。一般に名詞、動詞、形容詞、前置詞が語彙範疇とされ、具体的で豊かな意味内容を持つという特徴がある。一方、機能範疇は、文法的な機能を表す要素で、冠詞や補文標識がそれにあたる。派生接辞や屈折接辞も、品詞情報や時制、人称、数、性といった文法機能に関わる情報を具現したもので、機能範疇に関係する要素といえる。これらに加えて、語彙範疇と機能範疇の中間に位置し、いわば、第 3 の要素として存在するのが半語彙範疇である。これは語彙範疇よりは抽象的で文法的な機能を持つが、機能範疇よりは意味的に豊かな要素であるとされる。

例えば、thing という語は、独立した名詞として具体的に事物を表す用法を持つ一方、something という語の一部として抽象的に事物を意味することもある。また、take は「つかむ」などの具体的行為を表すこともあれば、take a look の場合のように単に抽象的な行為概念を表す語としても用いられる。おのおの 2 番目の用法が半語彙範疇としての用法とされる。半語彙範疇の語形成への関与について詳細は知られておらず、本論文はまさにその部分を、通時的、対照言語学的手法も取り入れ、実証的に解明しようとするものである。

本論文は 7 章からなる。第 1 章は序論で、本論文の目的と構成が述べられる。

第2章では、Emondsが提案したBLMと半語彙範疇の分析、さらには「多段階語彙挿入」(Multi-level Lexical Insertion、以下 MLI）の仮説について概観し、それらに必要な改訂を加え、本論文が依拠する理論的前提を導入している。BLM とは、心的辞書（Lexicon）に関するモデルである。通常は語彙範疇も機能範疇も心的辞書の中に分け隔てなく格納されていると考えられるのだが、BLM では Bifurcated の名が示す通り、辞書の内部は Dictionary と Syntacticon という 2 つの部門に分かれ、それぞれの範疇がそれぞれの部門に別々に存在していると仮定される。また、MLI の仮説では語彙挿入には統語計算に先んじて起こる Deep Insertion、統語計算中に起こる Syntactic Insertion、統語構造決定後の音韻具現の際に起こる PF Insertion の 3 種類があるとされ、Emonds は Dictionary 内の要素は Deep Insertion のみ可能である一方、Syntacticon 内の要素は Syntactic Insertion や PF Insertion も可能な場合があると考える。そして、半語彙範疇を元々Dictionary 内の語彙範疇だったものが機能範疇化して Syntacticon の要素に変化したものと分析する。しかし、本章は Syntacticon 由来で Dictionary の要素になった半語彙範疇も存在することを主張し、BLM の適用範囲が広がる可能性を示唆している。これを受けて、以降の章では Dictionary にも Syntacticon にも半語彙範疇が存在することが示され、本章が提示する BLM の新たな展開についてその妥当性が検証されていくのである。

第 3 章は、まず、Dictionary 由来で Syntacticon に格納されているタイプの半語彙範疇について論じている。これは Emonds が仮定しているタイプの半語彙範疇であるが、語形成に関わる新たなデータをあげることで理論を補強する。具体的には、前置詞と同形の接頭辞を扱い、前置詞に由来する半語彙範疇が存在することを証明している。さらに、この接頭辞は、Syntacticon から PF Insertion で挿入され、派生というより屈折に近い要素であるとする。一方で、Deep Insertion で挿入される語彙範疇的な接頭辞も存在することを確認し、この場合は複合による語形成が起きているとする。この分析は、Dictionary 由来の半語彙範疇の存在を裏付けることに加えて、接頭辞付加が派生形態論に関わる現象ではないという興味深い帰結も有する。

第 4 章は、引き続き Dictionary 由来で Syntacticon に格納されているタイプの半語彙範疇をさらなる事例をもとに論じている。具体的には、heeling-time のように非主要部の項構造を受け継ぐ英語の N-N 複合語などを検討する。例えば、the healing-time of all ills の例では、非主要部 heeling の目的語に相当する all ills が複合語全体の目的語として具現している。これは一見すると右側主要部の法則にあっていない。しかし、BLM のもと、MLI を仮定すれば、time は Syntacticon の半語彙範疇として統語派生の途中で挿入されるため、項が選択される段階では項選択の主要部として存在してはいないと分析できるのである。

第 5 章は、Syntacticon 由来で Dictionary の要素に変化するタイプの、つまり、本論文があらたに提案するタイプの半語彙範疇について論じており、まさに本論文のクライマックスとなっている。考察対象は主に動詞派生名詞である。動詞派生名詞は事象解釈と結果解釈を持つが、本章はまず、中英語期から近代英語期にかけて生産的であった動詞派生名詞を作る形態素、-ment に着目する。そして、事象解釈の-ment 名詞は、名詞化接辞-ment が機能範疇として Syntactic Insertion されて派生するものであり、一方、結果解釈のそれは、意味素性 f が付加することで機能範疇から半語彙範疇に変わった-ment が Dictionary 内の要素として基体と複合することで生起するという分析を提示し、それを史的データで裏付けている。さらに、drink などのように動詞と同形になる名詞、いわゆる転換名詞（ゼロ派生名詞）には結果解釈しかない事実を取り上げ、本論文で改訂した BLM の枠で説明している。具体的には、転換名詞は Dicitionary 内にある音形を持たない、空の半語彙範疇が基体と複合することで生起すると分析し、その妥当性を検証している。

第 6 章は、「壁ドン」のような日本語のオノマトペ複合語を分析し、それには ACTION という空の半語彙範疇が関わることを主張する。そして、この空の半語彙範疇がもとから Dictionary に存在することを論じ、Dictionary 内に存在する半語彙範疇の独立性を指摘することで本論文の分析の妥当性を高めている。

第 7 章は本論文全体のまとめと総括である。

審　査　の　要　旨

１　批評

これまで半語彙範疇という要素は、それ自体が深く論じられることはまれで、統語論において断片的あるいは部分的に言及されるのみであった。本論文は、この半語彙範疇の特徴やその成り立ちを形態論の観点から詳細に調べて解き明かしており、その学術的価値は非常に高い。また、依拠する理論が二分化語彙モデル（BLM）であり、その可能性を追求した試みは大いに野心的で、かつ、独創的なものとして評価できる。しかも、多段階語彙挿入（MLI）という仮説を十分に理解した上で、それを縦横無尽に使いこなした分析を数多く提示し、形態論の様々な問題について多くの新たな知見と示唆を与えているところは見事である。BLM の枠組みと MLI の考え方をこのようにダイナミックに、かつ、体系的に適用した研究は、統語論でも形態論でもこれまでにはなかったものである。さらに、記述的な面でも、本論文の価値は高い。英語の語形成の現象を通時的、共時的に詳細に調べた結果、多くの新たな記述的知見が得られている。本論文の成果は対照言語学的な考察にも見られ、通言語的妥当性の高い研究となっている。

このように全体を通して極めてレベルの高い論考が展開されている論文であるが、中でも特筆すべき点として次の 3 点があげられる。1 点目は、これまでの形態論研究をしっかり概観した上で、BLM に基づく本論文の位置づけを相対的に明確化している点である。本論文は高度な研究論文であるのと同時に、形態論の背景や基本概念を導入する基礎文献ともなる。特に近年の形態論について包括的で体系的な研究が少ない日本の言語学界においては貴重な貢献をするといえる。2 点目は、何が複合で、派生で、屈折の事例なのかを再検討している点である。例えば、接頭辞は派生形態論ではなく、複合か屈折形態論に関わっていること、動詞派生名詞の結果解釈は派生ではなく複合により生じるものであること、転換の現象は複合であることなど、根源的な問題について見方を大きく変えるような論考が続き、大変刺激的である。3 点目は、近年盛んになっているコーパスを利用した研究の理想的な実践例となっている点である。第 5 章は *The Oxford English Dictionary* のインターネット版をコーパスとして利用した実証研究であるが、決して場当たり的な調査による安易な数字、データの羅列ではない。まず理論があり、それを検証する目的で実例を調べ、得られたデータを丹念に吟味・分類し、その結果をもとに論をたてるという、コーパス利用の王道をいったもので高く評価できる。

ただし、基本的な現象や概念に関して、まだ不明な点も若干残っている。例えば、空の半語彙範疇の実体がまだ十分に明確にされていない。転換名詞を作り出す空の半語彙範疇がある一方、空の接辞はない。これは偶然なのか、理由があるのか。この点に何らかの答えがないと、空の半語彙範疇は独立に Dictionary に存在するという主張が事実の言いかえにすぎなくなってしまう。また、日本語のオノマトペ複合語に生起するとされる ACTION という空の半語彙範疇の実体も、それが行為動詞も非対格動詞も作ることから、現段階では不明と言わざるを得ない。もちろんこれらの論点は、今後の課題として取り組むことができるので、本論文の価値を何ら損なうものではない。

２　最終試験

平成 30 年 1 月 19 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。